

1. 律法には、後に来るすばらしいものの影はあっても、その実物はないのですから、律法は、年ごとに絶えずささげられる同じいけにえによって神に近づいて来る人々を、完全にすることができないのです。(10:1)
 - a. 新しい契約に対し、古い契約は後に来る良いものの影に過ぎない。神との交わり、神への礼拝、神の恵み、神との関係などはよりすばらしい形で現実となりこれから来るのである。
 - b. 古い契約は決して悪いものではなかった。むしろそれはキリストイエスを通して起こる現実を指し示すためのガイドであり型であった。
 - c. 律法は礼拝するために神に近づいて来る人々を完全にすることができなかった。
 - d. 今の時代のクリスチャンの問題点は古い契約と新しい契約を混同していることでなく、むしろ神に近づくことができないことではないだろうか。その理由はおそらく神の実体をうまく捉えられていないこと、そして影に過ぎないこの世の中に魅了されてしまっているからであろう。

2. もしそれができたのであったら、礼拝する人々は、一度きよめられた者として、もはや罪を意識しなかったはずであり、したがって、ささげ物をするのは、やんだはずで、ところがかえって、これらのささげ物によって、罪が年ごとに思い出されるのです。(10:2-3)
 - a. 古い契約は人々に罪を思い出させた。それは私たちがいかに聖なる神に近づくに値しないかということを示している。シナイ山で神ご自身がイスラエルの民に御姿を現されるという事例があったが、そのような経験がない今の時代の私たちは神に直接近づくことができないという問題をもっている。
 - b. 主を畏れることは知恵の初めであるが、神の偉大な愛とあわれみのゆえに、畏れを親しみに代えてしまうことがある。私たちが実際よりも神のことを知っていると思いつく時、本当の意味で神に近づくことができなくなるのである。神はプライドを嫌われる。
 - c. 新しい契約においては罪を贖うための動物のいけにえは必要なくなった。つねに自分の罪を嘆き悲しむよう勧めているわけではないが、神に近づくにはキリストが私たちのためにしてくださったことに対する心からの感謝と賛美が必要である。イエスは私たちのために生きた供えものとなってくださった。

3. 雄牛とやぎの血は、罪を除くことができません。ですから、キリストは、この世界に来て、こう言われるのです。「あなたは、いけにえやささげ物を望まないで、わたしのために、からだを造ってくださいました。あなたは全焼のいけにえと、罪のためのいけにえとで満足されませんでした。そこでわたしは言いました。『さあ、わたしは来ました。聖書のある巻に、わたしについてしるされているとおり、神よ、あなたのみこころを行なうために。』」(10:4-7)
 - a. イエスは律法が命じた動物のいけにえやささげ物を継続するためではなく、生きた供えものとして来られた。
 - b. 私たちもまた生きた供えものとなるよう召されている。この世はこれから来る世界の影に過ぎない。私たちがこの世でこの体を使って蒔いたものを次の世で刈り取ることになる。
 - c. イエスは。「神よ、あなたのみこころを行なうために来ました」とおっしゃった。それはキリストの弟子と自称する私たちすべてが持つべき姿勢である。
 - d. すばらしい実体はこれからやって来る。私たちの多くはあまり重要でないことのため一生懸命準備をしているが、その現実がやって来た時、影だけを追い続けることに人生を費やした人たちはそれがなんと意味のないことだったかと気付くであろう。